

第2 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の外国語科目に平成14年度に初めて加えられた「韓国語」も、今年で3回目を迎えた。高等学校学習指導要領においては韓国語は「その他の外国語」のカテゴリーに属すものの、目標及び内容については具体的な記述がない。平成16年度は、これまでに引き続き、高等学校学習指導要領のドイツ語及びフランス語に示されている内容に準拠しつつ、高等学校における韓国語教育の実態も勘案しながら、出題した。

平成16年度の出題の基本方針は次の通りである。

- (1) これまでのセンター試験の試験内容に準拠する。
- (2) 高等学校教科担当委員からの意見・評価を尊重する。
- (3) これまでのセンター試験の結果にかんがみ、予想される平均点が、他の外国語科目との間に著しい不均衡が生じないような難易度とする。

さらに具体的には次のような方針を立てている。

- (1) 日本の韓国語教育の現場で用いられている教材、市販されている教材や辞書類を考慮した出題とする。
- (2) 日本や韓国の各種言語データを考慮した出題とする。
- (3) 表記法については、韓国で定めた正書法及び韓国国立国語研究院の『標準国語大辞典』に基づいた。また延世大学校言語情報開発研究院の『延世韓国語辞典』も参考にした。大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国で正書法に違いが見える部分については、日本の高等学校教育においては韓国の正書法が採用されているという現状にかんがみ、原則として韓国の方式に準拠した出題とする。ただし、後者の方式に準拠する教育を受けた受験者が、著しい不利益を被らないよう配慮した。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 韓国語の発音・表記に関する基本的知識を問う問題である。A・Bはつづり字と実際の発音の関係を問うものであるが、韓国語は発音変化が豊富で、つづり字通りに発音しない場合が少なくない。このような発音変化の規則は、韓国語の学習上極めて重要なものであり、実際のコミュニケーションを円滑に進める上でも不可欠の学習事項と言えるだろう。

Cは漢字音を問う問題である。日本語同様に漢字による語いが多い韓国語を学習するに当たり、個々の漢字音を知ることは、語いを増やす上で多大な効果があると判断し、例年通り漢字音の問題を出題した。出題範囲はおおむね日本や韓国の教育漢字と同水準の基礎的な漢字を想定している。

全体的に正答率が高かったが、Cの問1は他の問題と比べて正答率が低かった。

- A 終声[ㄱ]が鼻音化して[ㅇ]と発音されることが正しく理解できているかを問う問題である。
この問題に関しては、正答率が高かった。
- B つづり字と発音の関係を問う問題である。

問1 [n]挿入(リエーション)と2単語間における終声の初声化に関する問題である。正答率は高いが、②を選択した誤答もまま見られた。

問2 激音化と口蓋音化に関する問題である。

C 韓国語の漢字音に関する問題である。

問1 日本語で「オン」という音を持つ漢字「穩」、「温」、「音」の韓国語における漢字音の異同を問う問題である。この問題は正答率が低く、⑤を選択した誤答が最も多かった。

問2 日本語で「ケン」という音を持つ漢字「健」、「険」、「遣」の韓国語における漢字音の異同を問う問題である。

問3 「共」、「協」、「公」の韓国語における漢字音の異同を問う問題である。日本語では「共」、「協」の音が同じであるが、韓国語では「共」、「公」の音が同じである。

第2問 文法・語いについての知識を問う問題である。出題に際しては、基本的な文法・語いの知識を問うとともに、学習者の間違いやすい点を取り上げた。A、B、C、Dに比べE、Fの問題の正答率が低かった。学習の際には、語いの正確な理解や日本語との表現の違いについて注意が必要であろう。なお、解説文中のⅠ、Ⅱ、Ⅲはそれぞれ第Ⅰ語基、第Ⅱ語基、第Ⅲ語基を示す。

A 用言の活用についての知識を問う問題である。変則(変格)用言の活用を中心に出题した。

問1 해요体で表された用言の基本形(辞書形)を問う問題。쉬워요はㄷ変則用言의 습다가 해요体で表されたものなので、②が正答である。正答率は8割台後半であった。

問2 ㄷ連体形で表された用言の基本形(辞書形)を問う問題。실은はㄷ変則用言의 신다의 ㄷ連体形であるので、④が正答である。正答率は6割に満たず、실다を選択した受験者が2割近くいた。

B 用言の活用と語いの知識を問う問題である。

問1 빠르다と고프다의 해요体を問う問題。고프다は고파요となるが、빠르다はㄷ変則用言なので빨라요となるので、②が正答である。正答率は9割をやや超えた。

問2 만들다と자다の尊敬形を問う問題。만들다はㄷ語幹用言であり、자다の尊敬形は주무시다なので、①が正答である。正答率は8割をはるかに超えたが、ㄷ語幹用言の活用を間違う受験者が目立った。

C 語い及び表現を問う問題である。

問1 日本語の助詞「～に」に相当する表現を選択させる問題。前の単語가 선생님(先生)なので、尊敬形の③-께가正答である。正答率は高かった。

問2 日本語の「～ている」に相当する表現を選択させる問題。日本語では「開^あいている」も「開^あけている」も同じ「～ている」であるが、韓国語の場合は「열려 있다」、「열고 있다」のように表現形式が異なり、用法も異なる。また、「開^あく」と「開^あける」に相当する動詞열리다、열다にも注意をする必要がある。正答は②열려である。基本的で大切な文法事項であるにもかかわらず、Cの問題の中で最も正答率が低く、3割台前半であった。①열어を選択した受験者が5割以上もいた。

問3 日本語の「自然に(笑う)」に相当する表現を選択させる問題。③자연스럽게가正答である。

問4 日本語の「～される」に相当する表現を選択させる問題。韓国語では前に来る単語によって表現が変わり、それぞれ意味が異なる。この場合は「尊敬される」なので、正答は④존경받는데である。Cの問題の中で最も正答率が高かった。

問5 日本語の「～していて」「～している途中で」に相当する表現を選択させる問題。正答は①쓰다가である。2割程度の受験者が②썼다가を選択したが、これは「書いた後で」という意味になる。

問6 日本語の「～(しようとする)ところ」に相当する表現を選択させる問題。正答は②참であるが、難易度が高いためか正答率が4割を切った。③맞を選択した受験者が3割もいたが、それは日本語に訳した場合の「ところ」に引かれたものと思われる。

D 数詞と用言の活用を問う問題である。

問1 数詞と助数詞(名数詞)の対応を問う問題。同一の助数詞(名数詞)번との正しい組合せを選択するもので、④が正答である。正答率は9割台半ばであった。

問2 類似した活用形を持つ用言を区別する問題である。③が正答である。入変則用言である냇다の活用形を間違える受験者が多かった。

E 類似の語いや表現を選択させる問題である。

問1 「消える」に相当する사라지다가比較的頻度の高い語であったためか、9割近くの高い正答率であった。ただ、1割程度の受験者が文脈に頼って、誤答である살아 오다(生きてくる)、살아나다(よみがえる)、지켜지다(守られる)を選んだ。

問2 「過去連体形+적어 없다=～したことがない」という経験表現と類似する表現を選ぶ問題である。9割強の正答率であった。「읽어 보았다」と「못 읽어 보았다」がそれぞれ「読んだことがある」、「読んだことがない」という表現に相当することを理解しておく必要がある。

問3 「間違いなく」に似た副詞を選ぶ問題である。8割を超える正答率であったが、1割をはるかに超える受験者が文脈に惑わされたのか「すぐに」を表す「곧」を選択した。

問4 「～したと思った」に相当する表現を選ぶ問題である。①の「～したことを知った」に相当する表現を選んだ受験者が2割半を超えたことからして、正答②の「했었다」という表現に慣れていなかったことがうかがえる。正答率は6割台前半と、Eの問題の中で最も低かった。

F 与えられた日本語の意味を韓国語で表現する問題である。

問1 밝다には「明るい」のほか「(夜が) 明ける」という意味がある。8割をかなり超える正答率であった。なお、④「달이 졌다(月が沈んだ)」を選んだ受験者が少なからずいた。

問2 「(～すると) ～するものだ」に相当するのは「-게 마련이다(I-게 마련이다)」である。6割強の正答率であった。③の「실수할 판이다」の誤答を選んだ受験者が3割強であった。

問3 「おごる」にあたる表現が「한턱 내다」であるために、「おごってもらう」に対応する表現として「한턱 받다」を選んだ受験者が6割弱もいた。正答③の「얼어먹다」を選んだのは3割弱であった。

問4 「(電話)して来る」に対応する韓国語の表現として、この文脈では④の「(전화)하고

오다」が正しい。正答率は2割台半ばでFの問題の中でもっとも低かった。③の「(전화) 해 오다」を選んだ受験者が5割半を超えた。

第3問 日常生活によく現れるような対話文を材料に、対話の流れに素直に入れば、おのずと対話が完成できる問題を作成した。これにより、基礎的な語い力、与えられた状況で適切な表現のやりとりが何であるか、対話文を正しく読みとっているか、対話の流れを理解しているかを問うようにした。なお、選択肢は対話全体を理解してはじめて正しく解答できるようにすると同時に、日本語への直訳による理解では誤りとなる選択肢も配分した。

A 短い対話を材料とし、対話の流れの理解力を見ることを意図した問題である。問1から問3までは1往復の文であり比較的易しい問題である。問4と問5は1往復半の文で少し難易度が上がっている。問6は1往復の文であるがかなり難しい問題で、Aの問題の中で最も正答率が低かった。

問1 「今日は何日ですか」という質問に対する答えを要求する問題で初歩的な問題である。正答率もかなり高かった。

問2 「どうして来ないのですか」という質問に対し来られない理由を問う問題である。これも基本的な問題であり、正答率が高かった。

問3 「誰かここに来て行かなかった？」という否定疑問文に対する答え方を問う問題で、これも基本的な問題である。正答率は高かった。

問4 「どんな結果になるか見ている」という意味に使用する「두고 보자」が正しく使えるかどうかを問うた問題である。두다 の代わりに意味が似ている 놓다 を使った誤答があった。

問5 「着ていく服がない」という文と「またそれを着て行けって言うの」という文を手掛かりに中間の文を選択させる問題である。これも比較的正答率が高かった。

問6 「かばんはどこか」という質問に対する答えを選択する問題。同時に、動詞「어딘 어디야? (どこじゃないでしょ!）」の意味が正しく理解できているかも問うている。

B 3往復からなる比較的長めの対話文で、日本語を学習する韓国人に関する内容である。逆の立場ではあるが、同様に言語を学ぶ受験者にとっては取り組みやすい問題と言えよう。

問1 一部分日本語になっているところを韓国語に訳す問題である。和訳の問題に比べて難易度が高いといえ、正答率もBの中では一番低く8割弱であった。前段の「たいていのことは全部わかっているでしょうに」がひとつのポイントとなるが、①と④では、それぞれ「알 텐데」、「이해할 수 있겠는데」と非断定的な表現になっているのに比べ、②と③は断定する形になっているので、正答は自ずから絞られるはずである。後段では、「勉強しなくてもいいんじゃないですか」を「-아야/-어야 (III-야) 돼요?」(「～しなければいけませんか」)に置き換えて考えられるかが問われている。誤答④の「공부하면 안돼요?」では「勉強してはいけないのですか?」の意味になってしまう。

問2 文の流れから「試験には自信がないからさらに勉強しなければならない」という内容であろうことは容易に推測できるはずである。したがって正答率も9割台前半であった。④のみが、「まだ分からないことがたくさんあります」となっているが、この他の誤答はいずれも「十分に勉強した」とか「自信がある」という逆の意味である。

C 5往復の対話文を材料に、文脈の理解、日本語に相当する韓国語の表現に関する知識を問う問題である。

問1 日本語に相当する韓国語の表現を問う問題である。「自生」という日本語を韓国語でどのように表現するのかを問うている。

問2 文脈から適当な文を選択する問題である。同時に、動詞 **하다** の意味が正しく理解できているかも問うている。直後の「**이것도 100 년은 된 거야**」から正答を判断する。

問3 文脈から適当な文を選択する問題である。直後の「**크기하고 빛깔 같은 것을 종합해서 판단한다**」から正答を判断する。

第4問 ある程度の長さの平易な文章を読ませ、書き言葉の表現の理解と論理的な文章展開の理解能力、並びに文中に含まれる会話文から正確に状況を把握する能力を測ることを目的とした。課題文は、高校生と思われる筆者と作家であるおじいさんの書店での出会いが題材となったエッセイで、読後に清涼感を残す、親しみやすい内容だと思われる。なお、従来に比して課題文がいくぶん長いものとなったが、第4問の得点率は約8割で、他の問題より高い方であった。

問1 前後の文脈を見て、「振り返ってみると」を表す「**돌려 보니**」が最も適当であることを導く問題で、文章の読解能力と語い力を問うた。文脈から、筆者が書店で本を吟味している際に声を掛けられたという状況がわかれば、正答に至ることが可能であろう。語い力のみならず読解力も必要であるためか、「のぞき見る」を表す「**들여다 보니**」を選択した受験者が多く、第4問の中でも正答率が低く、約4割にとどまった。なお、②は「うなだれてみると」、③は「のぼってみると」で誤答である。

問2 前後の文脈を見て、登場する三者（筆者・本屋の主人・おじいさん）の関係を正確にとらえているかを問う問題である。筆者に対する本屋の主人の発話であること、両者のやりとりのなかで、おじいさんは筆者の買った本の著者であることがわかれば、正答は「お喜びになるだろう」を表す②の「**기뻐하실 거야**」であると容易に導き出せよう。正答率は9割程度であった。

問3 指示詞を含む表現の意味内容を問う問題である。おじいさんが筆者の買った本の著者であることを踏まえれば、第2段落に書かれている、特にありがたいことということもないのに、「ありがとう」と言われたという疑問が解けるとともに、容易に解答できる問題である。正答率は9割を超えた。

問4 全体的な内容の理解を見る問題である。正答は③と⑤である。③は課題文の7～9行目の「**도서관에서 ~ 책이 있었다**」の部分に対応する。⑤は課題文の17～18行目の「**읽던 책을 주인 아저씨에게 ~ 했더니**」という部分と、課題文の20行目の「**나는 너무 놀라서 ~ 뛰어 나갔다**」の部分に対応する。正答率は高く、③は9割を、⑤は8割を超えた。なお、①はハンバーガーを食べようかとは思ったが、実際には食べに行っただけだったので誤答、②は本屋の主人は翻訳をしているようだが、本を出したという話は聞いたことがないとなっているので誤答、④はすまないと言ったのは筆者となっているので誤答、⑥はおじいさんに本を渡しに行っただけだったので誤答である。

第5問 課題文は、韓国の伝統的な占いとその哲学的背景について解説した文章である。占いといっても日常生活に頻繁にかかわっている風習であり、異文化理解の一助ともなる文章である。

文章の長さは昨年度より若干長くした。得点率は7割台半ばで、第4問より若干低くなった。

問1 いくつかの異なった意味・用法をもつ助詞(体言語尾)이나について、下線部43の用例がどれにあたるかを問う問題である。正答率は約9割。これは例示ないし列挙を表す用例であり、②が正しい。①は数量が予想以上であること、③は同等であること、④は容認を表す。

問2 空欄44に適当な表現を補う問題である。文脈の正しい理解と、慣用的表現の知識の両方を要求する。文脈上、「～を問わず」が最も適切であるが、これに該当する韓国語の表現は②의 막론하고となる。正答率は2割台後半と低かったが、これは漢字語でありながら日本語に直訳できないこの表現を学習していない受験者が多かったためであろう。①「無視して」、④「除外して」は文脈上最も適切とは言いがたい。③は誤答でありながら最も解答数が多かったが、これは日本語に訳すと「～を含んで」となり、さほど不自然ではないことに影響されたものと見られる。

問3 下線部45のこの文脈における意味を問う問題。正答率は6割台後半。直訳すれば「根をおろしたこと」であるが、ここでの意味は、①の「定着したこと」にもっとも近い。②は「起源をおいていること」、③は「問題視されていたこと」、④は「因縁が深いこと」。誤答のうちでは④が多かった。

問4 下線部46で指示された内容を問う問題。その前の文脈が理解できていれば、容易に正答が得られる。正答率は9割台前半。直前の文に含まれる「陰陽五行説をもとに作られていること」を指すので、正答は④になる。

問5 全体的な読解力を問う問題。①と⑥が正答。②は「四柱占いは男女の相性を見るために生まれた」の意味で、第二段落に「男女の相性」に関する話が出るが、そのためにこの占いが生まれたとは言っていないので誤答。③は課題文中には出てこない。④は「陰陽五行説はもともと韓国で始まった思想である」であるが、課題文ではこの思想の起源には触れられていない。⑤は「ハンゲルと太極旗はともに15世紀に作られた」であるが、太極旗に関してはそのような言及はないので誤答。

3 センター試験「韓国語」をめぐる焦眉の課題

平成14年度99名、15年度は169名であった受験者は、本年度は174名であった。昨年度の平均点は170.96点と、他の外国語科目に比してやや高めであったが、本年度は、平均点は153.64点となり、他の外国語科目との著しい不均衡は抑えることができたと思われる。

そもそも「韓国語」の平均点が高めであるのは、民族学校出身者及び帰国子女受験者の比率が他の外国語科目に比べ、はるかに高いであろうということに起因するものである。ゆえに、基本的には日本の高等学校で学んだ受験者を対象にしているセンター試験の性格上、これ以上問題の難易度を上げることは、好ましくない。見かけの平均点だけで軽々に難易度を問題にすることは、避けねばならないのである。そうした点でも、今回の平均点及び難易度は妥当な結果であったと思われる。

さて、日本の高等学校における韓国語教育は、そのほとんどが12単位を確保しておらず、6単位前後の学習時間しか確保できていない。つまり高等学校の韓国語教育はそもそも基本的にセンター試験の難易度の水準に達していないのである。だからと言って、他の外国語科目と難易度の点で「韓国語」だけを平易なものとしてはならず、すべての外国語科目は、高等学校で学んだ受験者にふさ

わしい、ある程度共通した難易度を維持しなければならない。結局のところ、前年度までの報告書でも指摘されているごとく、高等学校の韓国語教育の現実とセンター試験が求める水準との乖離が、現行のセンター試験の「韓国語」をめぐる最大の問題、それも解決すべき焦眉の問題となっていると思われる。

問題の解決の方向はもはや鮮明である。センター試験の難易度をいたずらに下げるのではなく、ただただ高等学校における韓国語教育の充実を図ること、これである。単に大学入試のための試験を実施するという限られた視野にとどまらず、センター試験が高等学校教育を触発、鼓舞し、高等学校教育が充実してゆく姿を見据えるという、巨視的な視野こそ、センター試験が日本における外国語教育、日本の教育に真に寄与するという、豊かな実りをもたらすであろう。

さらに「韓国語」のセンター試験の実施に当たっては今ひとつの緊急の課題が存在する。それは試験問題作成を担当し得る人材の養成、条件の確保が急務であるという点である。課題の性格上、詳細なデータを公開することはできないが、「韓国語」のセンター試験問題を作成し得る人材が、決定的に不足していることを、ここであえて述べておきたい。ちなみに、2004年度の委員の中には初年度委員だった者のうち5名が再度担当している。このことはおそらく他の科目では考えにくいと思われるし、当分の間この状態は続くだろうと予想される。

センター試験の「韓国語」は、日本語を母語とする者に対して韓国語についての試験を課するという性格上、試験問題を作成する者は、韓国語と日本語の双方についての深い学問的な知識と教育の経験が要求される。韓国においては近年、非韓国語母語話者に対する韓国語教育がとみに盛んであるが、そこで養成された人材が直ちに例えば日本のセンター試験の問題作成の人材として活躍できるかという点、これは残念ながら否である。韓国における韓国語教育は、基本的には直接法、すなわち韓国語で韓国語を教えることに終始しており、日本語母語話者にとって何が難しく、何が易しいのか、日本語母語話者の韓国語の誤用がなぜ起きるのかといった点に関する知識などをとってみれば分かるように、センター試験問題を作成する水準には、まだまだ程遠いと言わざるを得ない。ゆえに韓国で韓国語教育に携わる人材をセンター試験問題作成の人材として直ちに起用できないのである。結局のところ、日本にあって日本語母語話者を相手に実際の韓国語教育に携わり、なおかつ日本語と韓国語の双方に深い言語学的、言語教育学的な知識を有するものでなければ、センター試験問題の作成という重責をこなすことはできないし、そうした人材をまさに日本で養成せねばならないのである。

「韓国語」のセンター試験をめぐる焦眉の課題を要約すれば以下のようなになる。

- (1) 高等学校の韓国語教育の充実化。
- (2) 韓国語研究、韓国語教育の大学の専任教員ポストの拡充。
- (3) 韓国語研究、韓国語教育に関する研究支援。

現在、「韓国語」のセンター試験の実施は、危機にひんしている。しかしながら、この危機を脱するための課題を実践することは、まさにセンター試験のみならず日本の教育が望む、豊穡なる高みへと歩みを進めることにほかならないのである。